レコード

七月のクラシック

三つのバッハ全曲物

ゲールド ピアノの可能性広げる

41.7.1.西日本新聞 夕刊

▽グレン・グールド『バッハ平均率クラビア曲集第一巻』グールドがバッハの平均率クラビア全曲録音に着手した。グールドのバッハは定評のあるところ。ハープシコード的な音の効果をねらった演奏は、ピアノという楽器の可能性をひろげたといえる。透明な音色、豊かな感性、バッハの世界に肉薄しながらも現代的なユニークなバッハである。第二巻は目下録音中という。ピアノによる全曲はじめて、二枚組み（CBS）。

▽ヤーノシュ・シュタルケル『バッハ無伴奏チェロ組曲全集』ステレオ盤のフルニエ、トゥルトゥリエ、モノラルのカザルスに続く四枚目の全曲レコード。いままでははなやかさはなく、あらけずりな、どちらかというとスケールの小さい演奏だったが、このレコードでは柔らかさ、表現の豊かさが出ている好演奏、二枚組み。（フィリップス）

▽カール・ポプティーン『バッハ・フルート・ソナタ全集』ポプティーンはミュンヘン、バイエルン放送交響楽団の首席フルート奏者、わが国にも来たことがある。七つのフルート・ソナタとパルティータが一曲はいっている。曲としてもっともとび抜けてすばらしいのが『フルートとオブリガート・チェンバロのためのソナタ、第一番、ロ短調』一〇三〇』で、いきいきとした生命の躍動にあふれている。一〇二〇、一〇三一、一〇三三の三つのソナタは、バッハの自筆譜がなく確実にバッハの作品とはいい切れない。他の作品と比べてみることもおもしろかろう。二枚組み。（アルヒーブ）

三つのバッハ全曲盤のジャケット

▽『モーツァルト交響曲第四〇番ト短調、K550』バルシャイ指揮、モスクワ室内管弦楽団 幽遠なテンポのゆるやかなモーツァルトである。普通省略するくり返しの部分も原曲どおり全部演奏している（新世界）。

▽『サン・サーンス交響曲第三番、ショーソン交響曲変ロ長調』ミュンシュ指揮、ボストン交響楽団 ミュンシュ＝ボストンの名演で評判をとった両曲を新しく組み合わせたもの。サン・サーンスはオルガン入りの交響曲として有名。（RCA）

▽『ルービンシュタイン＝ショパン・リサイタル』アルトゥール・ルービンシュタイン 昨夏イタリアRCAで録音した一番新しい録音。作品六〇『舟歌』など六曲収められているが、作品一九『ポレロ』同四三『タランテラ』など、ルービンシュタインとしてはじめての録音がはいっているのも話題。（RCA）

▽『フィッシャー＝ディスカウ＝シューベルト歌曲集第5集』この集には『野ばら』『きけ、きけ、ひばり』『鱒』『君はわが想い』などシューベルトのポピュラーな歌曲が収められている。伴奏はジェラルド・ムーア（エンジェル）。

レコードは
ヤマハ
日本楽器福岡店